薔薇のマリア

鳥人ＲＯＣＫ

十文字 青

角川スニーカー文庫

本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

　太陽って、空に浮かんでいるものだとばかり思っていた。
　間違いだった。それだけじゃない。
　この巨大な縦穴の奥底にも太陽がある。
　黄色味を帯びた異界の太陽アナザー・サンだ。
　エルデンという名の都市で物理的に蓋ふたをされ、九頭竜大骨格レガシオス・ノ・インを触媒にした古いにしえの大いなる魔術〝古代九頭竜の呪い〟によって封印されたこの地下空間アンダーグラウンドには、地上の光が届かない。だから、穴の側面に自生している木々は、異界の太陽めがけて、下へ下へと伸びている。日光をたくさん浴びるために、思いきり幹や枝を横に張りだして、目一杯広げている巨樹もある。
　そうした樹木には、さまざまな寄生植物がびっしり絡みつき、ほとんど一体化していて、上から見ると大きな台か棚みたいだ。それらは棚樹シエルフツリーと呼ばれ、この場所を訪れる人間たちにとって、いい足場になっている――というか、そんなものでもなければ、ただのでっかい穴なので、へりから顔を出して異界の太陽を直視して目を焼かれるか、落っこちるしかないわけで。
　アンダーグラウンドＤ11フリアウ逆密林。
　広大にして深しん淵えんなるアンダーグラウンドは、長年好奇心旺盛で欲深な人間たちによって探索が進められてきた結果、現在、十四に区分けされている。
　たとえば、悪魔たちの根城、辺境地獄ともいわれるＤ１。Ｄ２下層は竜界ドラガンドに通じていて、竜とその眷けん属ぞくたちの巣穴となっている。Ｄ５、Ｄ６には大きな鶏みたいなメリクルが棲すんでいるし、Ｄ７には亜人ボーグの地中砦とりでアヴァシーがあって、Ｄ11と隣りあっているＤ13は、上層が下等蜥蜴とかげ人の巣窟テトルアープ、下層は蜥蜴人の居住地ダーナムレーンで――等々。
　その中でも、Ｄ11はちょっと特異だ。
　何しろ、ここには太陽がある。

湿ったなまぬるい風も吹きあげてくる。
木がある。しかも逆さに生えている。
それで、逆密林なんて呼ばれているのだが、フリアウのほうは人間の言葉ではない。
この逆密林の各所に巣を作って群棲している、鳥人ジャドー。羽と腕の機能をあわせもつ一対の翼よく腕わんで鳥のように飛び、体が羽毛で覆われている人間型異界生物フリークスの言語で、フリアウは「我らの王国」という意味だとか。
本当かどうか知らないが。
だって、こいつらからそんなことを聞きだせるとはとうてい思えない。
「あーもう、キーキーキーキーうるさい」
頭上を飛びまわっているジャドーの大群が、こちらを威嚇するようにけたたましく鳴いている。これがまた、かなり癇に障る甲高い鳴き声なのだ。耳をふさいでしまいたいが、状況を考えればそんな真似もできない。
戦闘が始まろうとしているからだ。
たまに自分でも「嘘みたい」と思うほど鮮やかなオレンジ色の目をすぼめ、真紅の髪の毛を左手で撫でつけながら、右手で腰から剣を抜いた。双生児魔導王ニオ・キオが地獄の侯爵ラデオンメリカイン・ザックに作らせたという魔導王時代の秘宝、焼きつくし刺し貫く剣バーニングレイピア〝劫ごう火か〟——だと思って、苦労して入手したのだが、真っ赤な偽物だった偽劫火。身長百六十サンチ……足らず。ずっと計っていないから、体重は不明。一般的な慣習に従って、姓は省略、名はマリアローズ。職業、侵入者クラッカー。所属はＺＯＯ。十七歳。いざ参る。嘘。とりあえず、皆の邪魔にならないようじっとしている。
仕方ないじゃないか。
マリアローズの技量を云々する以前の問題で、とにかくＺＯＯの面々こいつらってば、まともじゃなくてヤバくてすごい。まあ、約一名、そうでもないやつがいるけれど。
その約一名＋マリアローズ＋四名が、十五メーテル四方くらいのとある棚樹シエルフツリーの上で、二十頭程度の空飛ぶ鳥人ジャドーどもに立ち向かおうとしていた。

「急降下してきたところを叩くぞ」ちらりと振り返ってそう言ったのは、隊列の先頭真ん中にいる長身の男だ。どれくらい背が高いかというと、マリアローズより頭一つぶん以上でかい。その黄玉トパーズの瞳は静かに凪ないでいるものの、何かただならぬものを秘めているように見える。顔立ちは端整といってもよく、浅黒い肌や意志の強そうな唇は精悍な印象をも与えるのだが——持ち前のセンスの悪さがすべてを台無しにしていた。

　つまり、オレンジ色の炎模様フアイヤーパターンで端々や脇が飾られた、濃紺色の奇抜な全身鎧よろいが。

　ついでにいえば、どう考えても偽名だろうが、男の名もかぎりなく最悪に近い。

「トマトクン」

　男の左隣で二本の変形斧をくるくる回していた魚似の面白顔野郎が、その名を呼んだ。もう慣れたものの、本当にふざけた名前だ。

　ちなみに、魚似男の顔もかなりふざけている。一応、ＤＳ□ＴＹＱＮドラツグスター・タイクンという流行ブランドのしゃれた防具を身につけてはいるが、ぜんぜん似合わない。きっと前世が魚で、現世は半魚人なのだろう。トマトクンは背負っていた装飾過剰の大剣をすらりと抜いて、かつぐように構えながら半魚人にこたえた。

「何だ、カタリ」

「あ、いや、叩っ斬るのはええねんけど、アレまで壊してもうたら意味ないやないか。そこんトコ忘れんといてくれや。頼んまっせ」

　種族＝半魚人、数え方＝一匹はさすがに少し哀れなので約一名、個体名＝カタリは、キングダム・イズルハ出身で、独特の訛なまりがある。加えて、武具装飾具調度品家具古物名品珍品新製品マニアというかフェチでもあって、自称・生まれながらの稀少物蒐集家レア・ハンターらしい。

「ああ、わかってる」

　一方、心ここにあらずといった感じでそう返事をしたトマトクンは、あまり物事にこだわらないタチだ。

　テキトー、ともいう。

　ただ、何でもかんでもテキトーなのではない。やることはやるし、しめるところはきっちりしめる。センスは悪いし、とぼけたところもあるが、ま

あ、基本的にはクラン動物園ＺＯＯの頼れる園長マスターだ。今もトマトクンは、油断なく敵の動向をうかがっていた。
「そろそろか」
　そのとおりだった。
　マリアローズたちの頭上を旋回していた鳥人ジャドーどもが、一斉に頭を真下に向けて翼腕をたたんだ。落ちてくる。速い。ほとんど九十度の角度だ。そうして高速で獲物に迫り、足の鉤かぎ爪づめで蹴飛ばして引き裂いて引きちぎって抵抗する力を奪い、嬲なぶり殺しにしてから食糧にするのがやつらの常套手段なのだ。
　それだけに、やつらは手慣れている。慣れているだけでなく、統率されている。やつらは烏合の衆では決してない。いまだ空中にとどまっている一頭——三対の翼腕ときらびやかな飾り羽を持ち、武装までしている美しい雌が、やつらのリーダーだ。そして何を隠そう、そのリーダーこそがマリアローズたちの標的だった。正確にいえば、彼女がつけている凝った意匠の首飾りが。
　だが、とにかく今はまず、二十頭程度の兵隊ジャドーどもを何とかしなければならない。こちらめがけてまっすぐ落下突貫してくる鳥人間どもを駆除するのが先だ。
　あっという間だった。やつらは射程に入った。何の射程かといえば、トマトクンの剣身波打つ琥珀色の大剣のだ。
　それは、大きい。一見、飾り物か祭器のような外観だが、恐るべき威力を秘めていることはすぐにわかる。カタリみたいなマニアじゃなくたってわかる。それは、魔導王時代の秘宝の一つか、あるいはそれ以上の、人の手にあまるほどの稀なる剣に違いない。
　トマトクンは、その大剣を振りまわした。頭の上で∞の字を描くように、猛然と、豪快に、鋭く、正確に、二往復させた。ぶった斬って叩きつぶす残酷な音がした。大量の何かが飛び散ってドサドサボトボト周りに落ちた。それはトマトクンの大剣が製造したジャドーどものパーツだった。元ジャドーだった。
　とはいえ、トマトクンの大剣も無限に長いわけじゃない。その殺傷圏外から急降下してきたジャドーがいる。タイミングの問題で大剣をくぐり抜けた

ジャドーもいる。総数は不明だが、少なくともその半数近くは、ただ一人の驚異的な手練れによって処分された。

　彼はトマトクンの右隣にいたが、そのこと自体にあまり意味はない。

　なぜなら、砂色の衣をまとい、同じ色の髪と目をした彼は、とにかく疾はやいからだ。

　彼は雌雄一対の短剣でもって、素早く殺す。断ち切り、抉えぐり、削りとり、的確に致命傷を与え、場合によっては迅速に解体する。呼吸するように。当然のごとく。眉一つ動かさず。だが、時折、砂色の瞳を愉悦で揺らして。殺す。無造作に命を奪う。それが彼という生き物の習性だとでもいわんばかりに。

　ピンパーネル。ラハン大陸出身の、元アッサシン。それが彼だ。この永遠大陸エターナルコンチネントルミナス・アルファ、通称αアルフア大陸の共通語に馴染めないこともあって無口な彼が、もっとも得意としている表現形態がそれだった。

　殺すこと。

　彼は、それを為した。

　存分に、とはいえないまでも、五頭か六頭の鳥人ジャドーを、芸術的な鮮やかさで、ほとんど一瞬のうちにしとめてみせた。

　それから、これはあくまでおまけだが、カタリも二本の斧でジャドー一頭を叩き落とした。二本で一頭とは、何て非効率！　しかも、その際、カタリはバランスを崩して、もう少しで尻餅をつくところだった。格好悪っ！

　そんな半魚人とは対照的に、効率よく、華麗に、さらには可憐に、三頭ものジャドーを打ち落としてしまった者がいる。

　彼女は――そう、女性だ。脇に赤いラインが入っている白い女性用医術士帽ナース・キヤツプと、女性用医術士服ナース・ユニを着ている、絶世の美女、いや、美少女というべきか。それとも、やっぱり美女と呼ぶべきか。とにかく、くすみのない輝くばかりのブロンドに、新雪の肌、灰色がかった青い瞳、薄紅色の唇、やわらかそうなほっぺた、ほっそりした顎など、非のうちどころのない美の要素を彼女は備えまくっている。

　ただ、今も十分以上に美しいものの、見た目、彼女は子供だ。

　具体的には、十歳とか、そのくらい。

　そう見えるのだが、実は、違う。
「破は汰た！　破は汰た汰たっ……！」
　かわいらしい気合いを発して、衣装と同じく赤いラインが入った白い極限九手棍クライマツクスナインポールでジャドーどもの頭部を矢継ぎ早に突き、殴って、ぶん殴った彼女の実年齢は——
　ユリカ・白雪スノーホワイト、二十三歳。
「マリア！」
「はい！」マリアローズはユリカに呼ばれて思わずいい返事をしてしまった。やっぱり、二十三歳だけあって、中身はしっかり者のお姉さんなのだ。鵺ぬえ流古式戦闘術の使い手でもあるが、本業は癒しの技を行う医術士だし、面倒見もいい。だが、人一倍やさしいからこそ、あえて他人に厳しくすることもある。
　今がまさしくそうだった。
　優秀な仲間に囲まれて、マリアローズは気を抜いていた。実際、何のかの言って、半魚人よりも働いていない。というか、何もしていない。それで、ぼうっとしてないの、と、ユリカに叱咤されたわけだ。
　でも、これって結構、恥ずかしい。
　カタリあたりに言われたのなら、憎まれ口をたたいてごまかすこともできるが、相手がユリカだけに、素直に反省するしかない。反省するということは、自分のあやまちを認めるということだ。自分の至らなさを痛感して、それを人前でさらけだしたという事実に直面することだ。うわ。恥だ。鬱うつだ。けど、鬱になってるときじゃない。埋めあわせをしないといけない。マリアローズは赤面しつつ、慌ててユリカが吹っ飛ばしたジャドーの一頭に駆けより、とどめを刺すべく、そいつの胸に偽劫火を突き刺そうとした。その寸前だった。
「ギギャグギャギギャ……！」
「——わわわっ」マリアローズはあとずさりして、踵が何かに引っかかって、転びそうになった。いや、何か、じゃない。ここはもともと平らな地面ではない。樹木の幹や枝の間を寄生植物が埋めている凸凹な棚樹シエルフツリーの上だ。てっきり虫の息だと思っていたジャドーが急に暴れだし、それに驚いて不用意にあとずさりすれば、こけてしまってもおかしくない。

当然、ジャドーはこけた間抜けな人間を襲おうとする。マリアローズはジャドーに飛びかかられ、鉄板をもへこませるその鉤爪で引き裂かれる――そうなる運命からマリアローズを救ってくれたのは、やはり仲間だった。
「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」
呪文の詠唱につづき、カッと数条の電光が走って、そのうち一条が目の前のジャドーを直撃した。
爆ばく雷らい索さく。高位要素魔術の一つだ。ＬＥＰ（下層エレメンタルプレーン）の住人、雷霊Ｊｉｘの力を借りて引きおこされた雷撃に打たれたジャドーは、ブルプルブルプル小刻みに全身を震わせると、体のあちこちから煙をあげながらこっちのほうへと倒れかかってきた。「――っと……！」何とかそれをよけたマリアローズは、隊列の後方でユリカに寄り添うように立っている恩人に顔を向け、胸に手をあててほっと息をついてみせた。
「ありがと、サフィニア」
「……いいえ……」
我らがＺＯＯの誇る魔術士サフィニアは、かつての魔導王に匹敵する力を持つともいわれる、高名な閃光の魔女マチルダの弟子だ。それだけでもかなりすごいのに、サフィニアは師匠のマチルダに強烈な二つ名を与えられた。〝世界を滅ぼす者ザ・デストロイヤー〟。そして、マチルダはサフィニアをこう評したという。
「一億人に一人の凶星のもとに生まれた娘」と。
それが真実かどうかは知らないが、サフィニアがいつもやたらと不景気な顔つきをしていることはたしかだ。長くてまっすぐな銀髪や翡翠色の瞳はうっとりするくらいきれいなのに、青白い肌は死に瀕ひんした病人を連想させる。白と銀色を基調として各所に緑色を配したローブや、水晶様材クリスタリンの杖も、モノはよさそうだし、地味なデザインではないのだが、サフィニアが身につけるとなぜか陰気くさい。
年齢は、マリアローズよりちょっと上くらいだったか。だが、その年にして、まるでこの世の不幸を一身に背負っているかのようだ。生気のない声は冷気さえ帯びている。
「……わたしは、特別なことは、何も……まだ、終わっていませんし……」
「そ……そだね」マリアローズがうなずいて隊列に戻ると、トマトクンが顔

に似合わない下卑た笑い声を立てた。ヒヒヒ。何だよその笑い方。いつもそう思う。「迂う闊かつだな、マリア。本番はこれからだぞ。気をひきしめろ」
「わ、わかってるよ」
「ホンマにわかっとんのか？」と、カタリがカタリのくせに口を挟んできた。
「うっさいな。半魚人なんだから生意気に人間の言葉なんか喋らないでくれる？」
「せやけど、半魚人っちゅうことは半分人間やろ。人間の言葉くらい使つこてもべつにおかしいことないんちゃうか」
「あ、そっか。それできみも人間の言葉を話せるんだね。納得——」
「すんなや！　わしは魚の血ぃなんか一滴も引いとらんっちゅうねん！　顔もたいして似とらんし、正真正銘、人間じゃダァホ！　だいたいやな、マリアローズ、お前じぶん——」
「カタリ、いいかげん黙れ」
　トマトクンに怒られて、カタリは「……すんまへん」としょんぼりしている。
「ふん。ざまーみろ」
「こっ……」カタリはまた何か言いかけたが、本当にもうじゃれている場合じゃなかった。
　今、マリアローズたちの頭上を飛んでいるジャドーは、都合三頭だ。三対の翼腕を駆使して停空飛翔ホバリングしているジャドー・リーダーと、急降下の途中でギリギリ上昇に転じ、トマトクンの大剣から逃れた二頭——その二頭に、リーダーが歌うような美声で「ふしゅるるるう」と何か命じた。ジャドー語？　よくわからないが、たぶんそれは命令だったのだと思う。二頭はただちに従った。
　旋回して、加速して、リーダーが一対の翼腕で腰から抜いた二本の剣に、頭から飛びこんだのだ。
　当然、刺さった。頭骨が割れ血が噴きだして脳のう漿しようがぶちまけられ、二頭は見事串刺しになった。悲鳴はあがらなかった。要するに、それは不運な事故なんかではない。あの二頭はこうなることを覚悟して、リーダー

の仰せのままに遂行したということだ。なぜ？　何のために？　二頭の重みを加えて、リーダーの高度が下がる。ジャドーの体は飛べるだけあってかなり軽いが、やはり二頭ぶんの重量はそれなりなのか。リーダーは二対の翼腕を激しく上下させているものの、ずる、ずる、と落ちてくる。落ちながら、リーダーは歌っている。ふるうううううるううううふるうう。るううううふるううりるふうううるうう。
「くるぞ」トマトクンがぐっと背中を丸めて膝を曲げて腰を落とし、獲物に襲いかかる前の肉食獣みたいな姿勢になった。その右隣のピンパーネルは、雌雄一対の短剣を両手にぶら下げて突っ立ったままだが、べつにだらけているわけではない。この砂色の元アッサシンは、自然体で立っている状態から、一呼吸で何人もを殺害できる。トマトクンの左隣には、二本の斧を構えた半魚人。以上の三人を前衛として、その後ろにマリアローズ。少し下がってユリカとサフィニア。ジャドー・リーダーは降りてきつつあるとはいえ、まだ遠い。皆、見上げている。落ちてくる。歌いながら、落ちてくる。ふるうううううるううりるううう。るうううふるうう。その歌声はまるで呪文のようだ。いや、実際、それは呪文そのものか、きわめて呪文に似たものなのだ。
　鳥人ジャドーの社会は完全に女性優位で、雌は母であると同時に、優秀な戦士であり、教師であり、指揮官であり、さらには巫女シビルでもある。人間が長い歴史の中で魔術を生みだしたように、ジャドーの文化にも信仰にもとづいた邪術があって、当然、その術者は種族のエリートである雌だ。
　獣化の血術ブルータライズ・ブラッドスペル。
　彼女らがしばしば用いる邪術は、人間の間ではそう呼ばれている。著名な異界生物フリークス研究家のゲルル・デッドハント氏が名づけ、氏の著書を通じてそれが広まって定着したらしい。
　その邪術の原理は不明だが、プロセスはある程度知られている。同族の生いけ贄にえ。つまり、血。歌声めいた呪文の詠唱。恍惚状態トランス。儀式セレモニ。鳥人ジャドーの世界では「完全体」と見なされている雌が、母・教師・指揮官・巫女シビルの立場を捨て去って真に完璧な戦士となる。平常時、翼腕以外の上半身の大部分は地肌を露出していて、人間の女に近い容貌の彼女らが、真に完璧な戦士である戦獣ブルートと化すことで、顔も体つき

も変化する。骨格も。筋肉も。メキメキ。メキメキ。伸びて、一気にふくれあがり、引っぱられて、調整される。
　それは地上の何ものにも似ていないが、あえていえば、三対の前肢を持つ熊といった感じだろうか。
　しかし、熊よりもだいぶスリムだ。今や全身を覆っている体毛は硬化しつつも羽毛の名残を残し、後肢で人間のように直立歩行して、かつての翼腕は人間並みに武器を器用に操る。
　体高は二・五メーテルくらい。もともと雌は人間程度、雄は人間より少し小さいくらいなので、大きさの点でも戦獣ブルートは鳥人ジャドーを超越している。
　第一、やつはもう飛べない。
　鳥人じゃない。
　ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＧＯＯＯＯＯＯＯＯＨ……！
　最後の約十メーテル、戦獣ブルートは元翼腕で空を叩くことさえしなかった。飛び降りた。もちろん、人間だったらただではすまない高さだ。が、戦獣ブルートは足、脛すね、腿、尻、背中の順で接地するなり回転して起きあがって、駆けてきた。距離はトマトクンまでたった五メーテル。まばたきの間だった。くる。激突する。トマトクンが一歩前に出て大剣を振り下ろす。戦獣ブルートは一対の腕にそれぞれ一本ずつ剣を持っている。他の二対は素手だ。大剣と二本の剣が交錯する。そう見えた。見えただけだった。
　ＧＡＡＡＨ！
　戦獣ブルートはトマトクンの大剣を、よけた——のではない。斜めに振り下ろされた大剣のわずか手前で跳躍した。飛んだ、と思ったときにはもう、ピンパーネルが跳びあがって戦獣ブルートを迎撃していた。空中だ。雌雄一対の短剣が二本の剣をかいくぐって、斬った。神速で切断した。剣を持つ戦獣ブルートの手首を。だが、それは、戦獣ブルートにとって致命的な打撃ではなかった。なぜなら、やつにはまだ二対合計四本の腕がある。そして、当然やつはそのことを知っていた。それを利用した。やつは手首二本を犠牲にして、かわりに残り四本の腕でピンパーネルをつかまえた。抱きしめた。ピンパーネルに短剣で脇腹をぶっ刺されても構わなかった。きつくきつく抱きしめた。さしものピンパーネルも、これでは動きがとれない。落下してく

る。戦獣ブルートとピンパーネルがひとかたまりになって落ちてくる。「――くっ……！」マリアローズたちも手出しできない。よけるしかない。戦獣ブルートが、ピンパーネルが、棚樹シエルフツリーに落ちて、上下を入れかえながら、だが、離れず密着したまま転がっている姿を、しばし見ているしかない。「ピンパーネル……！」「ピンプゥッ……！」戦獣ブルートがピンパーネルの肩にＧＯＡＡＡＵと嚙みついて、肉がごっそり齧かじりとられても、どうしようもない。

　ただ、ピンパーネルを信じていた。

　大丈夫だ。ピンパーネルだから、大丈夫。

　実際、わずか数秒だった。

　齧られ、締められ、ばたん、ぐるん、どたんと回転しながら、ピンパーネルは窮屈な体勢で何とか右手首を返し、力をこめ、戦獣ブルートの脇腹に刺した雄のグレアデを、さらにもっと深く深くねじこんだ。これで戦獣ブルートの拘束が若干ゆるんだ瞬間があった。ピンパーネルはそれを見逃さない。するりと抜けた。逃げたピンパーネルを、戦獣ブルートが再びつかまえようとした。トマトクンがそこを大剣で狙った。

　ズガボッ――と、盛大に木が砕け壊れる音がした。

　外れた？　かわされた……？

　いや、それだけじゃない。戦獣ブルートはたしかに大剣の直撃はまぬがれたものの、無傷ではなかった。腕二本、うち一本はすでに手首から先が失われていたものの、とにかく二本の腕がトマトクンの大剣によってぶった斬られた。それでも戦獣ブルートは元気だった。転げまわって大剣から逃れると、走った。トマトクンの大剣とピンパーネルの短剣が何度も空を斬った。戦獣ブルートに追撃が届かない。反撃の意思はなさそうで、脇目もふらず逃走する戦獣ブルートは、速い。逃げる。逃げられてしまう。だが、こっちだって無為無策じゃない。「サフィニア！」マリアローズは仲間の名を叫びながら、ベルトの脇に並んでいるホルダーのカバーを外し、その中から小瓶を抜きとって、投げた。サフィニアはすでに呪文の詠唱に入っていた。タイミングはばっちりなはずだ。

　小瓶は、戦獣ブルートのちょうど右横に落ちて、割れ――爆発した。

　爆薬液ハーレム・ゴードン。空気に触れると気化し、体積が瞬間的に膨大

な量に増大して、要するに爆発する。同時に可燃性のガスが発生するので、炎も出る。それがあの小瓶の中身だ。マリアローズは爆弾と呼んでいる。

だが、実はこの爆弾、見かけほど威力はない。まともに食らえばたいへんなことになるだろうが、足許で爆発したくらいでは、死にはしないだろう。まあ、まさかそんなことが起こるなんて予期していないだろうから、びっくりして足が止まって火傷を負って爆風で体勢を崩してすっ転ぶとか。そのくらいが関の山だが、この場合はそれで十分だった。

左方向に倒れこんだ戦獣ブルートを目標にして、サフィニアがさっきから準備を進めていた魔術を完成させた。「——寒磁罪母刹ＲｅｕＬａ外ＮａｕＲａ矛Ｊｕｄａｓ怨氷結酷寒冷獄」

戦獣ブルートの体表が、みるみるうちに白いものに覆われてゆく。霜だ。すごい冷気だ。大気にあたためられた水分が、水蒸気となって噴きあがる。その中で、戦獣ブルートは動けない。動けなくなってゆく。ついには静止した。

縛ばく氷ひよう獄ごく。ＬＥＰから呼びだした水霊Ｈｙｄと時霊Ｘｅｏの力を借りて、あわよくば対象の生命活動を停止させて殺し、悪くてもしばらくの間、運動能力を奪い、あるいは低下させる高位要素魔術だ。

大半の魔術はターゲットの位置を視覚や聴覚などで固定する必要があるから、戦獣ブルートが動きまわっている間は手を出せなかった。マリアローズがハーレム・ゴードンで吹っ飛ばし、戦獣ブルートを足止めしたことで、サフィニアは魔術を発動する機会をえたのだ。何て見事な連携プレー。素晴らしすぎる。マリアローズはニヤリと笑った。どうだ。半魚人と違って、ちゃんと気合いを入れれば僕は役に立つんだ。

「……ふう」その半魚人が、斧を持ったまま手の甲で額をぬぐう仕草をしてみせた。「どうやら終わりみたいやな。なかなか手強い相手やった」

「なーにが『手強い相手やった』、だよ。きみは何もしてないでしょ？　黙って見てただけじゃないか」

「じっ、お前じぶんかて爆弾投げただけやろが！」

「そ・れ・が決め手になったの。わかる？　わかんないか。脳も魚並みだもんねー。ま、いーや。ほっとこ。半魚人は」「ボケ、誰の脳が魚——」

「あ、ピンパーネル、怪我したとこ、ちゃんとユリカに治療してもらわない

とダメだよ。わ。痛そう。さーて、と、トマトクン、戦利品戦利品」「無視すんなや！　寂しいやろ！　むなしいがな！　泣いてまうで！　ええんか！　ええんやな！　よーし、えーんえーん」「うっさいなーもう……」

　マリアローズはトマトクンとともに、倒れたまま微動だにしない戦獣ブルートに近づいていった。半べそのカタリとサフィニアもついてきて、まずは四人で戦獣ブルートを遠巻きにした。

「——大丈夫、だよね？」

　マリアローズにそう訊かれたサフィニアは、いかにも自信なさげにうつむいた。

「……た、たぶん……おそらく……」

　けれども、それはいつものことだ。「たぶん、おそらく」なら、まあ、大丈夫の範囲内だろう。たぶん。

「じゃ、カタリ。行って」

「何でわしやねん！」

「いや、だって、人命を軽視するわけにはいかないでしょ」

「わしかて人や！　わしの命は人命や！」

「えー……」マリアローズがカタリに疑いの眼差しを向けていると、トマトクンが呆れたように頭髪を引っかきまわして、戦獣ブルートにずんずん歩みよっていった。大剣の先でつついた。まったく反応がない。

「平気みたいだぞ。呼吸もしてない。死んじまってるんじゃないのか」

「あ」「お？」それからはマリアローズとカタリの競走だった。激走してトマトクンを押しのけて、二人ほぼ同時に戦獣ブルートにとりついた。首飾り。あった。純金かどうかはわからないが、金色で、戦獣ブルートの太い首にぴったりだから、結構大きい。一見して、いいものだとわかる。カタリじゃなくたってわかる。

　五、六サンチもある球状の黒い宝石。あれが高価なのだ。高い値段がつくだけでなく、特別な魔力が付与エンチヤントされている。

　魔導王時代の秘宝、〝観察者〟系の宝珠。

　それを正しく作用させれば、鳥のごとき視力をえるという。むろん、そんなものを鳥人が持っていても意味がない。宝の持ち腐れだ。だから、我々がこれを頂戴するのは、偉大な遺物の有効活用という面から見て正当なのだ。

それゆえに、このジャドー・リーダーが〝観察者〟を持っているらしいとの情報をカタリがキャッチしてすぐ、我々ＺＯＯはＤ11フリアウ逆密林の中層までやってきたのだ。
　だって、誰かに先を越されてはたまらない。このエルデンは、借金を返済できず他国から逃げてきた者、犯罪者、人生一発逆転を狙う夢想家、冒険家、金の亡者、物欲の権化、変態などで溢れかえっている。血眼になって儲け口を探している連中がうようよいるのだ。
　急いだ甲斐があったらしい。マリアローズとカタリは奪いあうように首飾りに手をかけた。ついに……！　とうとうゲット！　相場にくわしいカタリによると、時価約一億ダラーらしい。大金だ。一生暮らせる額だ。マリアローズとカタリは顔面ゆるみまくりで戦獣ブルートの首から首飾りを外そうとした。外せなかった。外すどころか。
「——って」「ひょ？」
　逆に引っぱられた。引っぱられた？　そう、引っぱられた。死んだと思っていた戦獣ブルートが、実は生きていて、いきなり飛び起きて駆けだしたのだ。死んだふりだったのか？　わからないが、いずれにしても、縛氷獄はまだ効いていた。戦獣ブルートは決して素早くはなかった。元気だったときの半分以下だった。だから間に合った。「む……！」とっさにトマトクンが左手を伸ばして足をつかまえた。足首だった。カタリの左足首だった。「みぐっ」カタリは奇声を発してたまらず首飾りから手を放した。この根性なし！　一億ダラーなのに！　マリアローズは、むろん手を放さなかった。むしろ、両手でがっちり首飾りをつかみなおした。さいわい、あるいは不幸にも、信じられないほど頑丈な首飾りだったし、放すつもりはこれっぽっちもなかった。何しろ、一億ダラーだ。でも、その判断は完璧に間違いだったといわれてもしょうがない。「マリア！」「マリアロォーズッ！」「——マリア！」「マリアさん！」「…………！」仲間たちの声。悲鳴に近い声もあった。そりゃあそうだ。
　だって、ここはもう棚樹シエルフツリーの端っこだった。
　戦獣ブルートは、そこから、飛んだ。
　真に完璧な戦士の形態を捨てて、もとのジャドー・リーダーの姿に戻りながら、彼女は飛んだ。

だが、半ば飛び降りたようなものだった。彼女は以前、三対の翼腕を持っていたが、今は一対だけが無事で、あと一本は傷ついていた。加えて、サフィニアの縛氷獄の影響もあった。それから、忘れてはならない、マリアローズの重量もあった。彼女は必死に羽ばたいたが、なかなか上昇しなかった。マリアローズはもう何が何だかわからず、とにかく応援した。がんばれ。がんばれ。がんばってくれないと——僕も死んじゃう……！

その甲斐もあってか、戦獣ブルートはやがて徐々に高度を上げた。

当然、マリアローズも飛んでいる。

そのことは認識していたが、自分がどこにいるのか、しっかり確認する勇気はさすがになかった。ああ、もうダメかな。ちょっとだけそう思った。恥ずかしい。お金（になりそうなモノ）に目がくらんで、この有様なんて。だけど、一億ダラーだし。正直、どこか楽観していた部分もあった。甘えがあった。僕はもう一人じゃないんだし。仲間は、僕よりずっとすごいやつらで。だから——きっと、何があっても、助けてくれる。

「マリア……！」トマトクンの声がした。目を開けた。何かが迫ってきた。下を見たら、思ったほど高くない。飛び立った棚樹シエルフツリーから、せいぜい二メーテル。ただし、へりから二、三メーテル離れている。落ちれば、たぶん異界の太陽まで真っ逆さまだ。それなのに。

跳躍してきた。

ピンパーネルだった。

彼は砂色の衣をはためかせて、雌雄一対の短剣を胸の前で交差させ、飛んできて、閃かせた。斬った。斬りまくった。空中なのに。雄のグレアデと雌のリレッザでジャドー・リーダーを切り刻んで、解体した。その一環として首飾りもちぎれた。それでもマリアローズは〝観察者〟を握りしめて放さなかった。馬鹿だ。すごい馬鹿。そのまま、僕は、落ちる。落ちちゃう。重力に引かれるまま。元ジャドー・リーダーの残骸といっしょに。ピンパーネルに抱きしめられ——て？　え？　ということは、ピンパーネルも道連れに？

「ピンパーネル……！」

違う。それだけじゃなかった。ユリカの声。マリアローズは信じがたい光景を見た。ユリアが、へりから飛んできた。極限九手棍クライマツクスナインポールをこちらに伸ばして。それを——棍の先を、右腕でマリアローズを

しっかりと抱きとめたピンパーネルが、左手でがっちりつかんだ。つまり、三人で落ちるわけ？　違った。まだだった。次はカタリだった。というか、カタリはすぐにユリカのあとを追って、彼女の両足首を抱えるようにしてつかまえていた。
　これで、四人。
　そして、へりから身を乗りだし、馬鹿でかい手でカタリの右足首を、ガシッ、と誰かがつかんだ。トマトクンだった。
「ＳｉｇｉＳ悶弩Ｅｒｏｉｓ襦甚」
　そのタイミングにあわせて、サフィニアが魔術を発動させると、風が起こった。吹きあげてくる風だった。強い風だ。人間を巻き上げるほどではないが、それは十分トマトクンを助けた。
「——があああああ……っ！」獣のような咆哮。風。力。一瞬だった。ぜんぶが一つになった。マリアローズたちは引っぱりあげられた。ぶわっと体が浮く感覚に襲われて、振りまわされて、次の瞬間にはちゃんと下に硬い地面があった——落ちずにすんだ。
「…………し、死ぬかと思たわ……」
「ほ、ほんと……」
　カタリとユリカは並んで大の字になって寝ている。
「……大丈夫ですか……マリアさん……」
　サフィニアがおっかなびっくりといった感じでマリアローズに近づいてきた。何事もなかったかのように立っているピンパーネルも、マリアローズを見つめている。トマトクンは両足を投げだして座り、大仰に片方の眉をつり上げて頭をかいていたが、マリアローズと目があうと、ヒヒヒと笑ってみせた。
「えーと……」マリアローズはサフィニアを見て、ピンパーネルを見て、トマトクンの顔は見られず、ユリカ、カタリの様子をうかがってから、下を向いて小さく呟くように言った。「……ご、ごめん……なさい」
「あー？　今、誰か何か言いよったか？　よう聞こえへんかったな。空耳かもしらんな」
「な、何も言ってない！　幻聴でしょ、きっと！　半魚人だから！　耳腐っててさ！」

　だが、いつもは言い返してくるカタリが、にやにやして聞いているだけだ。ばつが悪くなって、どうしてくれようかと考えている間に、ふと思い出した。「あ。これ――」きつく握りしめていた右手を開くと、そこに一億ダラーがあった。〝観察者〟。「おお！」カタリが横からのぞきこんできた。「放さんと持っとったんか。侵入者クラツカーの鑑やで、お前じぶん。どれどれ……」そのまま一秒経った。二秒経ち、五秒経ち、十秒経った。カタリはやおら〝観察者〟をつまみあげて「うーむ」と唸った。
「黒瑪瑙オニキスやな」
「……は？」
「まあ、モノは悪うない。ええオニキスや」
「…………はい？」
「せやから、オニ――」
「死んでしまえ」
　マリアローズは籠こ手ての硬いところでカタリの後頭部を思いきり殴った。「いだっ」何度も殴った。「だっ」しつこく殴った。「だっ、だだだっ、いだいがな！」「うっさい！　きみが一億ダラーだって言うから！　一億ダラーだって！　う、うう……」「な、泣くなや、何も泣くことないやろ？　な？」「誰が泣くか！　死ね！　死んじゃえ！　死んで腐れ、この馬鹿半魚人！」「おぐっ、いだっ、いだだっ、だ、誰か、助け――だっ……！」

end

薔薇ばらのマリア

鳥ちよう人じんＲＯＣＫろつく

十じゆう文もん字じ 青あお

角川スニーカー文庫

平成19年10月1日　発行

発行者　井上伸一郎

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/



BOOK☆WALKER